

学位請求論文 要旨

論文題目：いじめ研究およびいじめ現象諸相の分析

—ルネ・ジラールを中心としたいじめ現象理解の再評価と展開を通して—

申請者名

野村 洋平

いじめ (bullying) という現象は、日本の学校に特有のものではなく、諸外国の学校にも見られる普遍的な現象としてある。いじめという現象に注目してきた時期は、日本でも海外でもほぼ近い。社会の進展とそれに見合う形で整えられた学校制度との関係を考え、いじめを検討することが必要である。いじめの背景に、高度経済成長期である前期近代社会を経て、人々の間にある一定の豊かさが実現された後期近代社会に入るといふ社会の変化を想定することができる。本論文では、いじめ問題についての分析を「日本」の「後期近代社会」に限定することによって、いじめの本質を明らかにすることを目的とする。特に重点的に明らかにするのは以下の3点である。①日本におけるいじめ現象の原因とその社会的背景、②いじめの過程と暴力の特徴、③被害者の置かれた立場をどう捉えてどう救済するのか。この3点を一貫した理論的な視点で捉え、明らかにしていくことが本論文の大きな目的となる。

この目的を達成するために、R. K. マートンが提示した、「範例」というものに基づく「中範囲の理論」の考え方を取り入れる。マートンの議論は、「範例 (paradigm)」というものと「中範囲の理論 (middle-range theories)」という2つの重要な要素の組み合わせから成り立っている。範例とは、「ある社会的現象を説明するための概念と、理論的分析の端緒を提供する代表的な事例」である。こうした範例を活かし、調査(データ)と理論との間で相互作用が行なわれることにより、社会的現象についての考察を深めていくことが、中範囲の理論である。このような方法を用いて、いじめ現象についての事件・データ・研究を整理・体系化し、それを分析しうる理論を検討する。またその理論による解釈を経て、事件・データ・研究を再検討する。こうしたデータと理論とのやり取りを通して、いじめ現象の分析がなされる。

第1章では、事件・データ・研究をそれぞれ範例として整理し、事件・データ・研究がどのように関係するのか、検討すべき概念や問題点は何かを検討する。いじめが私たちの関心

的となったのは後期近代社会に入ってからである。新聞等のマスメディアを通して子どもたちがいじめを背景にして自殺したことが報道されるようになった。こうして徐々に、いじめ現象は、学校（学級）という空間で生じる子どもたちの病として社会問題化された。頻発する事件を受けて文部科学省（旧文部省）はいじめの実態を調査するに至った。一方で、いじめ現象の社会問題化と並行して、多くの分野からいじめ研究がなされてきた。哲学、心理学、教育学、人類学等、その研究分野は多様である。

事件史・調査データ・研究史を相互に検討していくことで、いじめ問題について検討すべき学問的課題が浮かび上がる。いじめ問題の研究の多くは、いじめが始まった後の子どもたちの人間関係を状況的、環境的に説明するしかなかった。当然、こういった側面はいじめ現象を把握する上で、われわれに一定の知見を提示した。しかし子どもたちをいじめという特殊な行為に駆り立てる背景や原因は何か、ということを一貫した視点から説明してくれる研究は少ない。また研究史を見ると、初期に見られた調査データと理論との相互作用を行なう研究は、現在ではあまりなされていない。

そのような研究状況の中で、過去においてルネ・ジラルの理論をいじめ研究に導入した、赤坂憲雄と亀山佳明の研究は特筆に価する。というのも、いじめ現象を一貫して説明できる視点を提起し、またいじめという特殊な暴力形態がなぜ生まれるかを説明しているからである。そこで、第2章において、ジラルの諸理論を検討し、赤坂と亀山がもたらしたいじめ研究の成果を焦点化する。

第1章では調査（データ）を重点的に検討してきたが、第2章においては、そうした調査（データ）を整理・体系化する理論図式を整備していく。ジラルの諸理論に、いじめの諸概念や事例の統合的解釈を推し進め、いじめ現象を一貫した視点から読み解く可能性を見る。そこで、ジラルの諸理論といじめ問題との関連を詳述する前に、まずジラルの諸理論を重要な著作から要約し、紹介する。要約を通して、ジラル理論の根幹となる部分を提示する。ジラルの諸理論は多岐に渡るものであるが、ここでは「いじめ問題」を解明するために有効と思われる部分に限定し、個々の理論とそれらの関連性について紹介する。ここで主に紹介するのは、「欲望の模倣論」、「暴力論および供犠論」、「キリスト教論と救済論」の3つである。

セルバンテス、フロベール、スタンダール、プーセント、ドストエフスキーといった、世界文学を代表する作家たちの書いた文学作品を解釈することにより、「欲望の模倣論」は主に『欲望の現象学』で展開される。「欲望の模倣論」は、三角形的欲望という考え方に現わ

れている。主体（S）－媒体（M）－対象（O）との三者が作り出す三角形の中で、媒体（M）の対象（O）への欲望を主体（S）が模倣するという仕組みが、三角形的欲望（欲望の三角形）と呼ばれるジラール理論の一つ目の根幹となる。三角形的欲望は、主体（S）－媒体（M）との差異が消失するような世界において激しくなる。三角形的欲望が激化する主体と媒体との間には嫉妬や妬みといった潜在的な暴力が蔓延する。こうした暴力の問題について、ジラールは独自の理論を展開することになる。

暴力の問題を重点に取り扱ったのが、『暴力と聖なるもの』の中で展開される「暴力論および供犠論」である。ジラールの暴力論はその普遍性を求めて、神話・悲劇・民族学研究の諸領域に及んでいる。ジラールは「供犠」の根底には暴力の問題が潜んでいると考える。この暴力の存在を仮定しなおすことによって、独自の暴力－供犠論を展開した。共同体内の内的緊張、怨恨、敵対関係は「相互暴力」と呼ばれる。相互暴力に陥っていた共同体内部の人々は、それを解消させるために一人のいけにえに対して進んで「集合暴力」という供犠を行なう。そこでは一人のいけにえを除いた他の共同体成員の間に「満場一致」の状態が生まれ、お互いに向けられる暴力の恐怖から解放され、秩序がもたらされることになる。秩序がもたらされた後、当初共同体内部に差異の消失を生み出したとされた邪悪な者（供犠対象者）は、今度は逆に共同体に秩序をもたらした良き者とされる。つまり供犠対象となった者は、邪悪な者（暴力をもたらした者）であるとともに、良き者（差異＝秩序の創始者）として崇められる存在ともなる。こうしていけにえは「聖なるもの」と捉えられるに至るのである。聖なるものと暴力の問題を関連させて考えたところにジラールの意義があると言える。

こうした供犠は、暴力の蔓延により共同体を破滅させことがないようにとられる予防的方策として定着する。したがって、共同体にはつねに一人の人間に対する暴力から逃れることはできない。ではこうした暴力を見据え、それを乗り越える視点はどこにあるのか。ジラールは主に『身代りの山羊』において、共同体の暴力（供犠）とその悪循環を見直すために「キリスト教論と救済論」を展開していく。とりわけ新約聖書に見られる4つの福音書においては、集合暴力の隠蔽や消去といったものを引き起こす欺瞞を、明らかにしていく力が働いている。犠牲者に対しての罪の宣告には理由はなく、ただその犠牲者（身代りの山羊）を中心にして迫害者たちが結束していることを聖書は明らかにする。犠牲者からの訴えはこれまでなされたことはなく、聖書においてこのことが明確に主張されることになる。キリストの受難はその最たるものであり、この受難はあらゆる供犠を無効にし、それ以後のあらゆる供犠の企てを受け容れられなくするものとしてある。

赤坂は「暴力論および供犠論」に、亀山の研究は「欲望の模倣論」を背景にして生じる学校でアノミー状況が3つの暴力形態（「体罰（教師から生徒への暴力）」、「対教師暴力（生徒から教師への暴力）」、「生徒間暴力（生徒から生徒への暴力）」）を生み出すとする。そして、生徒間暴力の一つの形態として「いじめ」を検討し、いじめに対し「暴力論および供犠論」を適用している。高度産業社会における「三角形的欲望」の昂進、社会的状況や学校内における教師の権威の失墜から生じる教室内的アノミー状態（ジラルの用語では「潜在的暴力」「相互暴力」の蔓延）、潜在的暴力・相互暴力が発露しお互いに対する攻撃がなされないようスケープゴートが選ばれ、その一人に対して全員一致の暴力（「集合暴力」）が行なわれる、といった「いじめの過程」をジラルの諸理論および赤坂と亀山の研究から体系化することができる（以下、【表】いじめの過程参照）。

【表】いじめの過程

I. 大状況(社会)	I. 大状況
	①消費社会の進行における「三角形的欲望」の激化
II. 中状況(学校)	II. 中状況
	②教師-生徒関係における「三角形的欲望」の浸透
III. 小状況(学級)	III. 小状況
	③教師の権威の失墜（教師-生徒間の差異の消失。無規範、アノミー状況の成立） →この状態から、「いじめ」に向かう方向、「体罰」、「対教師暴力」へと向かう方向に分化
	④子どもたちの間での相互模倣および相互暴力の激化
	⑤「身代りの山羊」になるべき人間へのくしるし（差異）探し
	⑥「身代りの山羊」に対する集合暴力=儀礼としての供犠 (<全員>対<一人>の図式、差異の創出)
	⑦学級という小社会の秩序回復
	⑧再び、相互暴力の激化（以下、④～⑧の過程が繰り返される）

この過程を見ることにより、これまでのいじめ研究、いじめ現象についての問題点が整理されることになる。そして、ここで整理をされなかった問題点については、ジラルの諸理論をどのように適用していくかが以下の章で検討される。これまで分析されなかったいじめに関するデータとジラルの諸理論をいじめの過程との関係で考えることにより、いじめ現象を分析する手順が整えられる。

ここから具体的なデータと理論との相互作用が試みられる。まず第3章においては、実際のいじめ事件をもとにして、ジラル理論の有効性が試される。事例として取り上げられるのは、2011年に起きた大津いじめ事件である。この事件は世間の注目を集め、少年の自殺

から数ヶ月を経て、いじめと自殺との因果関係が調べられていくことになった。第三者調査委員会が設置され、事件から長時間が経過したにもかかわらず、丹念な調査により詳細な報告書がまとめられた。この報告書は A4 版 231 ページに及ぶ大部なものであり、ここにこの事件の全容を解明しようとする第三者調査委員会の熱意、社会のこの事件に対する注目に答え、今後いじめ問題を解決するにはどこに注意したらよいかを明らかにしようとする努力が全体から伝わってくる。

本論文では、この事件に関する新聞記事と報告書、そして事件について書かれたルポルタージュを詳細に追って分析することにより、この事件の過程に、「いじめの過程」で説明がなされたものが、ほぼそろっていることが明示される。現実の事例がジラール理論の有効性を証左するとともに、ジラール理論を通したときにいじめを引き起こした要因がはっきりと浮かび上がってくる。いじめが激しくなる前に見られたクラスのアノミー状態。潜在的暴力から集合暴力へと向かわせるグループ間の不和、そして集合暴力の激化。少年の自殺のあとの新たなスケープゴートの選出。また一方で、いじめの過程から整理・体系化されるデータの枠を超えて、注目すべき問題も明らかになる。少年の自殺といじめとの関連を歪曲・隠蔽しようとした教育委員会等の動き。犠牲者を擁護する声の高まり。また、まったく事件と関係のない一般市民を巻き込み、事を荒げようとする、匿名の暴力。こうした新たな課題を整理することができる。

次に第4章においては、近年いじめ現象において注目させる「ネットいじめ」を取り扱う。インターネット上の匿名性を帯びた空間でなされる誹謗中傷には枚挙にいとまがない。またネットいじめについての分析はまだ始まったばかりである。ネットいじめという問題を整理・体系化するような理論的分析はまだなされていない。こうしたことから、まずネットいじめの範例をまとめ、その範例に見られる特徴を検討していく。ネットいじめの範例には3つのものがある。こうした3つの範例を読み解くためには、W. リップマンが提示した「現実環境と擬似環境」の違いについての議論、D. リースマンが「社会的性格論」、M. シェーラーの「ルサンチマン」概念が手がかりとなる。こうした諸概念をジラールの諸理論を用いて検討することによって、3つの範例がどのような背景や原因を持っているのかを明らかにする。

後期近代社会に入り、ネット空間に見られる「現実環境と擬似環境」との間の乖離は著しくなる。この乖離は人々の間に大きな人間関係上の不安を引き起こす。そして、特に擬似環境をうまく用いながら現実環境に適応するようなオタクという「社会的性格」が生み出され

ていく。こうした性格は、現在の社会に生きる人々に広く行き渡っている。擬似環境を通じた現実環境への適応には、人々の間に「ルサンチマン」を引き起こす可能性が高い。人間関係上の不安は、ネットという擬似環境で増幅されやすい。こうした不安の増幅は、人々の間に潜在的な暴力を蔓延させ、いつも誰かに攻撃性を集中させようと狙っている状況が生まれる。社会の移行（前期近代社会から後期近代社会への以降）に伴い、三角形的欲望の深化現われる。差異の消失した人間たちの間では、欲望の模倣が容易となり、主体と媒体とは重なりあう。それに伴い、双方が差異を主張し合うために繰り広げる攻撃性も増し、自己の内部に「ルサンチマン」としてたまっている。こうしたルサンチマンを集合暴力として解消するところに、ネットいじめの根源的な原因を見る。インターネット上に現われる匿名の攻撃は、他者の欲望に対して無関心を装うとともに、他者の承認を求めずにはいられない三角形的欲望の病から生じる。他者からの承認を得るため、誰かを攻撃しやすい「道徳的な理由」を捏造（「価値転倒」）し、他者のバックアップを得た誹謗中傷を浴びせる。ジラール理論によりリップマン、リースマン、シェーラーの諸概念を包括的に捉えるととともに、こうした理論の体系化を経て、ネットいじめが分析される。また、ネットいじめの諸範例が、理論の体系化を推し進めたという面を確認できる。

第5章においては、これまでいじめ事件としてあまり議論の俎上にのぼらなかったものを取り扱う。2010年6月に「友人を救えなかったことを苦にして自殺」したと報道された、川崎の少年の自殺をまず範例として整える。どうして少年は遺書に「友人を救えなかった」という文言を残したのか。この点について、ジラルールの理論の中で、これまでいじめ現象に適用されてこなかった、「キリスト教論と救済論」を中心にして分析がなされている。ジラルールのキリスト教論は、いじめ研究に関わらずジラール研究の中でも宗教的な要素が強いとして敬遠されてきた。しかし、この少年の事例にキリスト教論を用いて分析することにより、いじめ現象の新たな側面が見られるとともに、犠牲者として置かれる少年の苦悩の源泉を確かめることができる。

いじめの事件史は、被害者の側の復讐の拒否を如実に示しており、川崎の少年の自殺にはこの訴えが顕著に現われている。また少年が、共同体内部で供犠にかかろうとしている友人の身代りとなることを示すことによって、少年の死は「受難」であったことが共同体に伝わっていく。その受難の意味を理解した共同体の人々は、少年の死を理解しようと遅ればせながら気付いていくことになる。子どもたちの自殺が生じた後の共同体は、次に誰を犠牲に供するか悪循環に陥ることが多く、そのような事例は数多く見られる。しかし、この川崎の

少年の死の後には、このような悪循環は断ち切られているのが分かる。ジラールのキリスト教論が現実の事例に適用され、少年の死を、集合暴力としての「供犠」ではなく、「受難」として捉えることが可能になる。少年が残した遺書や少年の周囲にいる人々の変化が、「受難」の側面を明示する。集合暴力としての「供犠」ではなく、「受難」として捉えることが可能になる。そして、これまでの自殺した子どもたちの声をこの視点から振り返って見たときに、いかに復讐の拒否を訴えていたかが確認される。

第6章において、被害者の苦痛を捉えたいうえでどのように被害者と向き合うかを考える。ジラールの「受難」についての議論は、共同体が被害者に対する集合暴力によって生じる秩序から成り立っていることを、被害者が告発しているという面を明らかにした。しかし、共同体の外に出された被害者と共同体の個々人がどのように対面し、被害者の苦痛を理解するに至るのかという面は明らかにしていない。被害者の苦痛を個々人が感受し、苦痛の意味を理解するための手がかりとなる理論図式が必要となる。そこで、被害者の苦痛に焦点を定めてより分析を深めるために、エマニュエル・レヴィナスの他者論を手がかりとする。

ここでは、いじめの被害者が抱えていくことになる「傷」の問題に言及される。具体的には、子どもの存在の根幹にある「無垢」というものに含まれる「可傷性」というものの分析を通して、被害者の特殊性が明らかにされる。いじめの被害者は学校を出た後、社会（共同体）の外に置かれた経験に傷つきながら、社会内で生活していくことを余儀なくされる。社会の外に置かれた経験をし、それでも社会内で位置を占めるためには、二つの方法しかない。一つは、被害者の側を免れるために、加害者の側に加担すること。もう一方は、被害の経験を自身の核とし、自身と同じ傷を負う無実の被害者を保護する側に回ることである。供犠の悪循環を断ち切る手がかりは、加害者の側に回る限り絶対に見えてこない。被害者の側が体験してきた仕組みを敏感に察知し、供犠の共同体に巻き込まれない（あるいは、巻き込まない）よう手を打つことである。被害をこれまで受けた者が、どう加害者を赦すか、どう疎外されてきた自己と向き合うかという難題に取り組む糸口が、そこから見えてくる。

本論文はまず、ジラール理論がこれまでいじめ研究に適用されてきたにもかかわらず、大きな評価をされることがなかったが、その理論がいまもって有効であることを再評価した。そして、これまで適用されなかったジラール理論を徹底していじめ現象に適用することによって、いじめ現象の新たな側面を見ようと試みるものである。ジラールの理論図式をデータや過去の研究に適用することにより、体系的・一貫性が出てくる。この体系的と一貫性をもっていじめ現象を見ることにより、新たなデータの発見やデータを解釈する理論図式の

精密化を図ることができた。ここに本論文の大きな意義があると考えている。

一方で今後取り組むべき課題として以下のものが残された。①量的データの分析と理論図式による統合、②裁判経過や学校の対応など、事件後の経過についてのデータ蓄積の必要性、③どのようにしたらいじめを乗り越えることができるのかについての分析、の3つが今後取り組むべき課題として、本論文を通して確認することができた。

本論文はこれまでのデータや研究を、主にジラールの理論図式を通して、整理・体系化し、いじめ現象の理解を深めた。また一方で、新たなデータから、理論図式の修正を試みた。こうした成果は、データや理論を絶対的なものとして固定化することが目的ではない。中範囲の理論が社会学という学問において大きな魅力となるのは、こうしたデータと理論との相互作用を継続して行なうことで、また新たなデータと理論図式が発見され、社会現象の分析が進むことにある。本論文はいじめ現象理解の一過程であり、こうした試みは継続して続けられるべきものである。